１０・実験結果と、これからのこと

９から数日後。主人公達の最寄りの空港。
今日は、さとりがアメリカに戻る日。
さとり、トワにはアメリカに戻ることを伝えたが、主人公には話していない。
一人でひっそりと日本を去るつもりでいた。
しかし、そうはいかないようだ。
さとりが空港のカフェでコーヒーを飲んでいると、そこにトワがやってくる。

ＳＥ１：【５秒ほど流してから足音。その後怨霊小さくなり、トラック終わりまで流れ続ける】空港の環境音
ＳＥ２：【５秒ほど流してセリフ】トワが近づく足音

さとり、呆れたような様子で顔を上げる。

〈さとり〉
「【わざと呆れたような声で】
義理堅いわよね。わざわざ見送りに来なくたっていいのに」

〈トワ〉
「【不服そうに】
だって。あの人には言わずに行くつもりなんでしょう？」

対するトワ、不服そうにぶすっとしている。
自分はさとりとの約束通りに実験を終了させ、その結果をさとりに伝えたというのに、肝心のさとりは、自分の正体を主人公に打ち明ける気がないからである。
それどころか、さとりは今回アメリカに行ってしまったら、もう二度と日本には戻ってこないような気さえする。
トワは、どうにかしてそれを阻止したいと思っている。

〈さとり〉
「ええ。当分戻ってこないと思うわ。
……場合によっては、もうずっとあっちで暮らすかも。
あの子のこと、よろしくね？
あの通り、お人好しで泣き虫だから。

……でも、貴方みたいな人がそばにいてくれるなら、安心かな」

さとり、トワの考えていることはわかっている。
トワは自分と似たところが多いが、自分と違うのは、なんだかんだで義理堅く、肝心のところで損得よりも情を優先するところである。
トワはこのまま自分をアメリカに追い払い、主人公には当然何も話さずにいれば、ただ主人公と甘い生活を送れる。
それをトワ本人だって理解しているくせに、トワはそれができないのである。
さとり、そんなトワを突き放すために、わざと冷たく、淡々と自分の意見を述べる。

〈さとり〉
「ところで、貴方はなぜか私に恩を感じているようだけど。
私は十三年前、あくまで自分のために、交換条件として貴方を助けたのだから。
どんな結果になろうと、貴方が気にする必要はないのよ」

〈トワ〉
「でも……」

〈さとり〉
【なんだか、姉が妹を諭すような言い方になる】
でも、じゃないわよ。
私がどうしても知りたくて……。
だけど、自分ではどうしても確かめられなかったことを。
トワちゃんは代わりに実証してくれた。
私はもう、それで充分。
あの日をもって、晴れて実験はおしまい。
これからは貴方の好きなように生きてちょうだい」

〈トワ〉
【納得がいかない。珍しくもごもごと、拗ねたような口調になる】
結果が出たのなら尚のこと、日本でやることがあるんじゃないんですか？
そうするためにずっと。サトリは十三年も待ってたんじゃないんですか？」

〈さとり〉
「食い下がるわね……。
私はずっとあの子と友達でいたかった。だから確かめたかった。

あの子がいつか言った言葉が、本当かどうか……。
そのために貴方を利用したの。
他には何もないわ」

〈トワ〉
「じゃあ。もしあの人がトワの正体を知って逃げたら、どうしてたんですか？
その時サトリはどうするつもりだったんですか？」

〈さとり〉
「その時はその時ね。
貴方と私が仲良くショックを受けて、あの子に幻滅するだけね。
……でもそうはならないって、貴方も私もわかってた。
それでも確かめておきたかったの。貴方だってそうでしょう？

【明るく笑って】
だって本音を言えば、私、腹が立ったんだもの！
本物の怪物を見たこともないくせに。
ずっと目の前にいても気づかなかったくせに。
仲良くしたいだなんて。
本当にそんなことできるのかって、昔からずっと怒っていたのよ。

【泣きそうになりながら、心底嬉しそうに】
でも本当だった。あの子は一度ならず二度までも、人ならざるものを助けて、愛した！
私はそれを確認できただけで充分。
もう、それだけで、ずっと生きていけるわ」

〈トワ〉
「そうですか……」

〈さとり〉
「そうよ。だから、そろそろ行きなさい。

【わざと意地悪にトワの口調の真似をする】
あの子に『もう一秒も離れたくないですう～』とか言ったばかりなんじゃないの？」

〈トワ〉
【怒っているのではなく『いい加減素直になれよ！』と思っている】
イヤミな女！」

〈さとり〉
【明るくからかうように】
そうよ？　お互い様でしょう？　長い付き合いなんだから、それくらいわかってよね」

〈トワ〉
「そうですよ。トワとサトリは、本当に長い付き合いですから。
【『さっ、らっ、に』は『更に』のさらに】
それでトワは、サトリよりもさっ、らっ、に。イヤミな女ですので！
だからこれでもサトリのこと。本当のお姉さんみたいに思ってるわけですよ」

さとり、トワの『そうですよ。トワとサトリは、本当に長い付き合いですから。それで、トワは、サトリよりもさらに、イヤミな女ですので』までは理解できる。
しかし、そこからなぜ『だから。これでもサトリのこと、本当のお姉さんみたいに思ってるわけですよ』に飛躍するのか理解できない。
トワが何を言おうとしているのか、理解しかねている。

〈さとり〉
【言葉とは裏腹に優しく】
どういうこと？　貴方が妹なんて、勘弁してちょうだい。
これ以上手をかけさせるつもりなの？」

〈トワ〉
「……そうですよ。だから！　連れてきましたから。
【主人公に向かって、甘々に】
はーい❤　ごめんなさぁい、お待たせしましたぁ❤
もういいですよ❤　お話終わりました❤」

ＳＥ３：【音源の元のスピードよりも早めて、５秒ほどを流す】主人公がこちらへ駆け寄ってくる足音
ＳＥ４：さとりが驚きのあまり立ち上がる音

〈主人公〉
「さとりー！」

さとり、絶句して息をのむ。
考えれば、わざわざトワがここまで来た時点で予測できたことのはずなのに、今日のさと

りはなぜかそれができなかった。
主人公、そんなさとりの思いなど知らず、さとりの方へ歩いてくる。

〈さとり〉
「……！　来てたの……？」

〈主人公〉
「うん。トワちゃんに教えてもらったんだ。
もう。連絡なしに帰っちゃうなんてひどいよー」

〈さとり〉
【つとめて落ち着いて振舞っているが、これまでにないほど動揺している】
「……今の話、聞いてた？」

さとり、予想外の展開にうろたえる。
しかし何も知らない主人公はいつものように明るく、さとりが内心どれだけ動揺しているかなど気づきもしない。
主人公、のんびりと返答する。

〈主人公〉
「ううん！　まったく！　空港って賑やかだよねー。
結構近くにいたのに、全然聞こえなかった。
だからね。トワちゃんが『話が終わったら、おいでおいでって手を振ります❤』って言ってくれてたから。それをずっと待ってたよー」

さとり、主人公の言葉に、思わず拍子抜けする。
力が抜け、思わず今まで出したことのないような笑い声が出てしまう。

〈さとり〉
【思わず笑ってしまう】
「貴方なら、そう言うと思ってた！
あはははは……。昔から肝心なことを聞いてないのよ、貴方って。
【トワに話を振る】
ねえ？」

〈トワ〉

「ねえ。さすがですよねえ？
でもぉ、日本のファンタジーノベルの主人公ってー。
大事な時に、なぜか難聴になるものだそうですよぉ」

〈さとり〉
「【呆れているようだが嬉しい】
……そうなの？　じゃあ、この人なら今すぐに主人公になれるわね。
まったく。小説じゃなくて、私には全部現実なんだけど……。
じゃあ、せっかくだし、義妹（ぎまい）さんのご厚意に甘えさせていただこうかしら？」

〈主人公・トワ〉　※このセリフは読みません。
「？」

さとり、立ち上がり、主人公に近づく。
特に何かが変わったわけではないのに、かつてないほど自由な気分だと感じる。

ＳＥ５：【０―２秒ほどを使用】さとりが主人公に近づく足音

〈さとり〉
「ねえ。さっきトワちゃんと話していたこと。
貴方にも。いつか……いつか必ず話すわ……」

〈主人公〉
「？　わかった！　楽しみに待ってるね！」

〈さとり〉
「だから」

ＳＥ６：【２３―２４秒の『コカ』という音を使用】さとりがヒールで背伸びする、かつんという音

〈さとり〉
「【主人公の頬にキスする】
ちゅっ。
……だから。次に帰国する時は……色々と。わからないかもね？」

〈トワ〉
「ちょ……！」

〈さとり〉
「【これまでにない、吹っ切れた、明るい声】
じゃあまたね。さよなら！」

ＳＥ７：【１分１９―２４秒ほどの音を使用】さとりがヒールで去って行く足音

主人公、きょとんとしている。
あまりにも突然の出来事に、一体何が起きたのかわからない。

〈主人公〉
「え？　今までこんなことされたことなかったんだけど……!?
突然のアメリカ式かな!?
ト、トワちゃん！　今のは一体……どういうことだと思う!?」

〈トワ〉
「【呆れて。日本のファンタジーノベルの主人公は都合よく難聴になる上、さらに鈍感でなくてはならないらしいということも思い出し、まさに主人公こそがぴったりであると感じている】
もーお！　そんなのトワに聞かないで下さいっ！
はぁ。
こうなったら。トワもうかうかしてられませんし。
ただでさえトワ、超不利なのに。一瞬も油断できません」

〈主人公〉
「なんのはなし？」

〈トワ〉
「んー？
何の話かと言いますとぉ。えっちな話、です❤
【やや早口で。内心本気で焦っている】
早くトワなしじゃいられなくなる身体にしなくっちゃ。
今夜から覚悟しておいて下さいね❤」

〈主人公〉
「？　？　？　？　？
さとりとトワちゃんの話はあれだねえ。ハイコンテクストだねえ。
わたしには、何が何やらだよー」

〈トワ〉
「【……これでも全然わかんないですか……と思いつつ】
ふふふ！
アナタを大好きな人は、想像以上にいっぱいいるってことですよ。
じゃあ、帰りましょっか❤
大好きですよ、ワタシの運命の人❤
絶対誰にも負けませんから。トワのこと。ずーっと好きでいて下さいねっ❤」

しばらく1の環境音を流し、フェードアウトする。